



2007年度の機械系就職状況

松久 寛 (機械理工学専攻 教授)

今年の就職は、機械および航空の修士、学士を一括して担当した。就職先一覧を表に示す。

機械工学郡 平成19年度就職先

就職先企業一覧	人数(推薦)	学部	修士	博士
トヨタ自動車 株式会社	7(7)	1	6	
三菱重工業 株式会社	5(5)		5	
株式会社 神戸製鋼所	4(3)		3	1
(株)リクルート	4	1	3	
本田技研工業 株式会社	3(3)		3	
新日本製鐵 株式会社	3(3)		3	
川崎重工業 株式会社	3(3)		3	
松下電器産業 株式会社	3(3)		3	
三菱電機 株式会社	3(3)		3	
住友金属工業 株式会社	2(2)		2	
松下電工 株式会社	2(2)		2	
株式会社 豊田自動織機	2(2)	1	1	
(株)森精機製作所	2(1)	1	1	
野村総合研究所	2	1	1	
(株)島津製作所	2		2	
ソニー(株)	2		2	
JR東海	2		2	
(株)キーエンス	2		2	

目につくところでは、

- 1．自動車（とくにトヨタ）が多い。
- 2．重工（三菱、川崎） 電気（松下、三菱）がコンスタントに多い。
- 3．鉄鋼は新日鉄が毎年取っていたが、長年冬の時代であった。しかし、この2，3年で、住友、神戸製鋼が復活した。
- 4．リクルート、野村総研といったシステム系が増えてきた。

全体的な傾向として、次のことが言える。

- 1．自由応募が徐々に増えてきて、推薦と自由応募が半々である。

旭化成 株式会社	1(1)		1
株式会社 東芝	1(1)		1
コマツ	1(1)		1
住友電気工業 株式会社	1(1)		1
関西電力 株式会社	1(1)		1
ボッシュ 株式会社	1(1)		1
株式会社 村田製作所	1(1)		1
株式会社 日立製作所	1(1)		1
石川島播磨重工業 株式会社	1(1)		1
株式会社 リコー	1(1)		1
ローム 株式会社	1(1)		1
富士フィルム 株式会社	1(1)		1
株式会社 NTTデータ	1(1)		1
シャープ 株式会社	1(1)		1
日産自動車 株式会社	1(1)	1	
東京電力株式会社	1(1)		1
株式会社 デンソー	1(1)		1
(株)リクルートエージェント	1	1	
(株)タカコ	1	1	
フューチャーアーキテクト(株)	1	1	
ローランド株式会社	1	1	
(株)安川電機	1		1
NECシステムテクノロジー(株)	1		1
かざか証券株式会社	1		1
MU投資顧問株式会社	1		1
西日本旅客鉄道(株)	1		1
ヤマハ発動機株式会社	1		1
ヤマハマリン(株)	1		1

2. 重工、電気などは関西系が多い。
3. 関東の大学に比べて、製造業に就職する比率は多い。

私見

1. **推薦制度**： 大学推薦のとらえ方が企業によってまちまちである。 大学推薦の学生は、原則的に合格にする企業と、自由応募と同様にどんどん落とす企業

エスエムジー(株)	1		1	
コーポレート・ディレクション	1		1	
電通国際情報サービス	1		1	
住友ゴム工業(株)	1		1	
ブリジストン	1		1	
日本IBM	1		1	
LG電子	1		1	
サッポロビール株式会社	1		1	
住友商事株式会社	1		1	
プロクター・アンド・ギャンブル	1		1	
(株)インクス	1		1	
JRモルガン証券(株)	1		1	
(独)宇宙航空研究開発機構	1		1	
ABB Comporate Research	1			1
東邦テナックス(株)	1			1
(財)電力中央研究所	1			1
(独)産業技術総合研究所	1			1
東京エレクトロン	1			1
新キャタピラー三菱(株)	1		1	
株式会社ゲームリパブリック	1		1	
トヨタテクニカルディベロップメント(株)	1			1
宝酒造株式会社	1		1	
財団法人阪大微生物病研究会	1		1	
シスメトリックス株式会社	1			1
豊田中央研究所	1		1	
日本電信電話株式会社	1		1	
合計人数	107(54)	10	89	8

京都大学 博士進学 7名

がある。私の理解では、「大学推薦の学生は大学に推薦を依頼した限り、それを尊重し、原則的に採用する。その代わりに、他社を受験しないという制約を設ける。」である。しかし、一部の企業は自由応募と同様に自社にあった学生だけを採用する。これでは、推薦の学生には、1社しか受験させないために、不合格になってから次の企業の受験手続をするので、どんどん時間がたち6月、7月にずれこみ遅れていくことになる。自社に適した学生だけを取りたいというのであれば、自由応募にすればいい。しかし、企業としては、自由応募になると、大量の受験者があり、合格通知を出しても、果たして何人入社してくれるか分からないので、推薦にしたいという。これはいいとこ取りで、大学を学生に足かせをはかせる道具としてしか見ていないのではないか。

2. **面接試験：** 2割ぐらいの学生が不合格になる。その理由を企業は「面接の結果：元気がない、入社目的が不明、何をしたいのか不明、チーム作業に向かない」という。現在の日本の学生にとって、会話は不得意である。ディベートの訓練を受けていないし、年齢の違う人との会話の経験もほとんどない。そこで、推薦の学生にとっては初めての面接で旨く話せるはずはない（自由応募の学生はたくさんの会社を受験するので、だんだん慣れて旨くなるが）。社会経験もなく、その企業の中身も十分知らない学生にとって、自分に何ができて何に向いているのかは分からないのが普通である。その学生が何をできるかを見極めて、それに適した職を与えるのは企業の仕事であると思う。
3. **学卒と院卒：** 院卒の給料は2年前に入社した学卒の人と同じである。これでは、2年間の給料や授業料などの差額(500万円以上)はどうなるのでしょうか。表向きは、人生は長い、企業に入ってから取り戻せるという。しかし、学部卒の人の方が役員になっている比率の方が高いように思える。大学の人、専門知識を身につけた院卒でなければという。しかし、企業の人はこちらでもいいという。「院の2年間でどれだけ知識、能力をアップしたかが疑問である、早く企業に入ってもらい、そこで教育するほうがいい」という企業の本音も聞こえる。院卒が価値を持つには、リーダーとなるための、教養、幅広い知識、専門知識、応用力、創造力、組織力などを身につける必要がある。これは、研究室での研究だけでは得られるものではなく、社会活動も含めて、目的意識をもって日々修練する必要がある。若い人の工学離れを防ぐ意味でも、院卒の給料を大幅に上げてもらいたいものである。それには、院生がそれに見合う価値をつけねばならないが。

2007年度 「学生と先輩との交流会」 総括

学生が社会を知り、卒業後の進路を考える際にも大きな役割を果たしての標記イベントも、昨年、第5回を終えた。後掲の SMILE のページに関連記事があるが、実務を取り仕切ってくれた、京機学生会執行部 SMILE がアンケートを実施し、昨年度のイベントの評価を行ったので、その結果を報告する。

1. 学生の感想

学生の満足度は図 1 にあるように大満足が 28%、満足が 65% というすばらしい結果であった。7% あった不満の声は「人が多くてなかなか喋れなかった」、「時間が足りなかった」という内容であった。また、「企業に聞きたかった内容」は図 2 のような結果になった。企業情報、業種、職種、研究について聞きたいという希望が強いことが読み取れる。このような結果は昨年までの傾向と同じでやはり、「先輩から生の話を聞く」ことが大切であると学生は感じているからではないだろうか。

学生の具体的な感想として一例を以下に挙げる。

- ・ 色々深い話を聞いてよかった
- ・ 普段は聞けない話を聞けない人から聞けるのは素晴らしい
- ・ イメージがはっきりとしたような、新しい面も見る事が出来た気がする
- ・ 多くの企業の話聞いた（特に技術者の方の視点を知ることができた）
- ・ 堅苦しくない雰囲気企業の説明が聞いた
- ・ 社員さんの本音が聞いた
- ・ 話を聞いてくれて、いろいろアドバイスをくれた

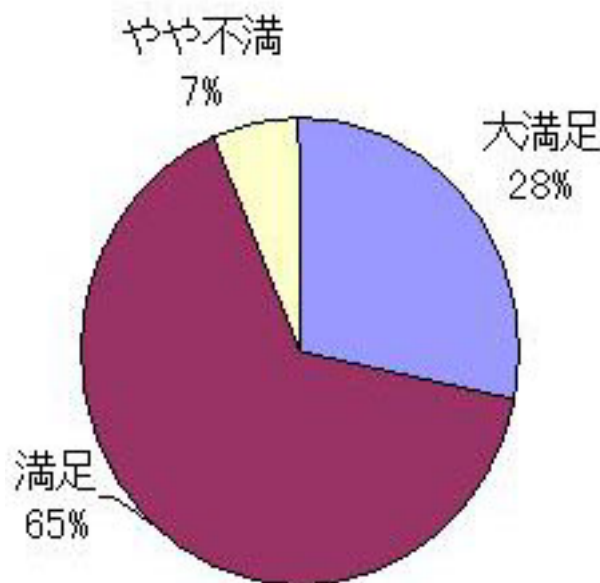


図 1 学生の満足度

このような結果から、様々な企業に勤めておられる先輩方とじっくりと気軽に交流が出来、社会で働くことを含め将来のことを考える上で貴重な機会になったのではないかと思う。また、「今まであまり興味がなかった企業、もしくはあまり知らなかった企業のブースを訪問しましたか。」という質問に対しては、3人に2人が「はい」と回答しており、そのうち9割の学生が「興味を持った」と答えた。この結果から学生の視野の広がりに貢献できたのではないかと思う。さらに、「本

交流会を通して社会・企業に対して抱いていた従来のイメージの変化はありましたか」という質問に対しては、約 6 割の学生が「変わった」と答えた。学生が自分にあった仕事を見つける為に本交流会が寄与できたのではないかと見える。

2. 先輩の意見

まず、「今年度の交流会の目的は、あくまで「先輩」として学生と交流していただくこととし、採用活動の場とはしないこと」には 9 割以上の方から「賛同」していただいた。例えば、

- ・ これまでも機械系出身者のみが参加しており、もともと先輩として学生と交流するという認識でいるため。
- ・ 採用非採用の目で見られていると思うと学生が本音で悩みを言えないと思うから。

といった意見も多いことが確認できた。一方で、

- ・ 決して賛同できないというわけではないが 100% 採用活動と切り離すのは難しいと思われま
- ・ ただ、「先輩と学生の交流」と「採用活動の場」の線引きは難しい感じがします
- ・ 結果的に採用の質問を学生から受けるケースが多いから

など、先輩方の戸惑いがあることや、採用活動の定義の甘さ、難しさなどが明らかになった。また、学生への更なる趣旨の伝達や、その上で学生が何を求めるのかなど、今後考えなければならないことは多い。

次に先輩方の交流会全体への満足度の結果を示す。このように 9 割以上の方々に満足していただいた。満足いただいた声としては

- ・ 一人一人の学生さんと個別にじっくり話をすることが出来たため
- ・ 学生への情報提供のみならず、彼らがどのようなことを考え、感じているかを聞いたので、勉強になりました
- ・ 学生の率直な希望や悩んで

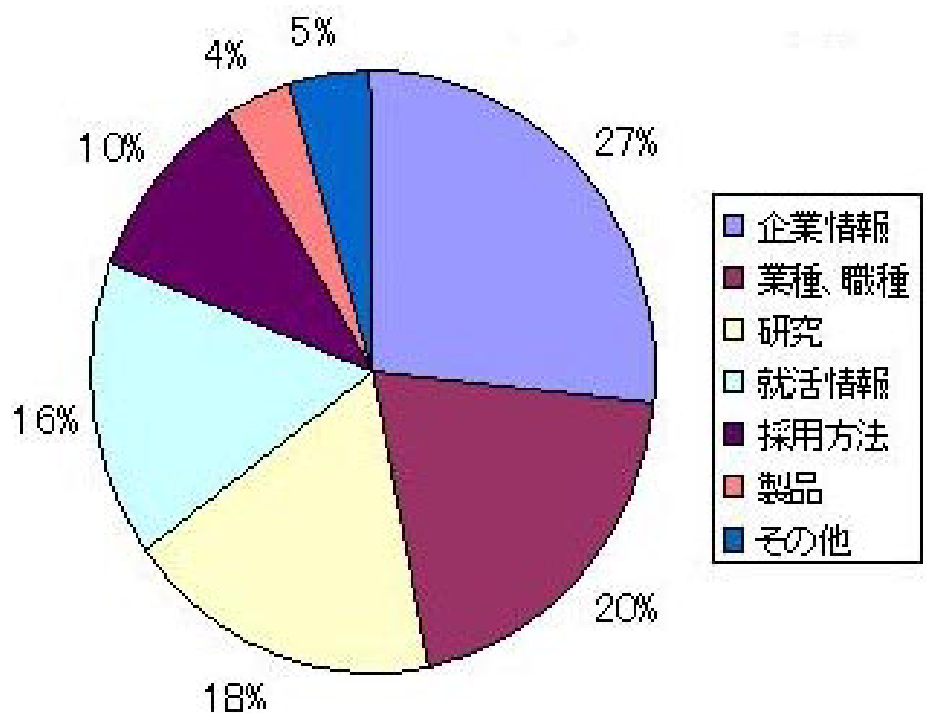


図2 企業に聞いたかった内容

いることが聞けたこと、就職の動向や理科離れの実情が分かったこと

- ・ 少しは社会人としてアドバイスできたと思うなど

一方で、不満の理由としては、

- ・ 参加企業が学生に対して多すぎる
- ・ ブースの配置について

などであった。

3. パネルディスカッション

本年度は様々な企画を実施したが、代表としてパネルディスカッションに関する学生の評価を紹介する。

満足頂いた点としては

- ・ 実はあまり興味を持っていなかったが話を聞いてとても面白かった
- ・ いろいろな会社を比較できたのは良かった
- ・ メーカー全般の共通する考えや市場動向などが聞けてイメージが固まった
- ・ 全然違う分野の会社の人と一緒に集まって同じ質問に答えるのは面白い逆に不満な意見として
- ・ 企業間のディスカッションもあっていいのでは
- ・ 会社毎の強みの話を聞きたかった
- ・ 各社の特徴を知れる質問を考えるのが難しく感じた
- ・ 途中参加では流れが掴めず質問しづらかった

などであった。本来の目的である、複数の企業を同時に比較することで、各社の社風や魅力がよく分かったのではないかと考えられる。

4. 今後の展望

アンケートの結果から、学生と企業の先輩方の大多数に満足していただき、交流会は当初の目的を達成し成功に終わったと感じている。しかし、私たち SMILE の力不足故、企業の先輩の方が不満に感じられた点もいくつかあった。特に問題となったのは、趣旨の方向転換という中で、多くの先輩の方々に戸惑いを感じさせてしまったのではないかとということである。今後、双方にとって有意義な交流を行っていくには、採用活動の線引きなど難しい課題が残っていると感じている。

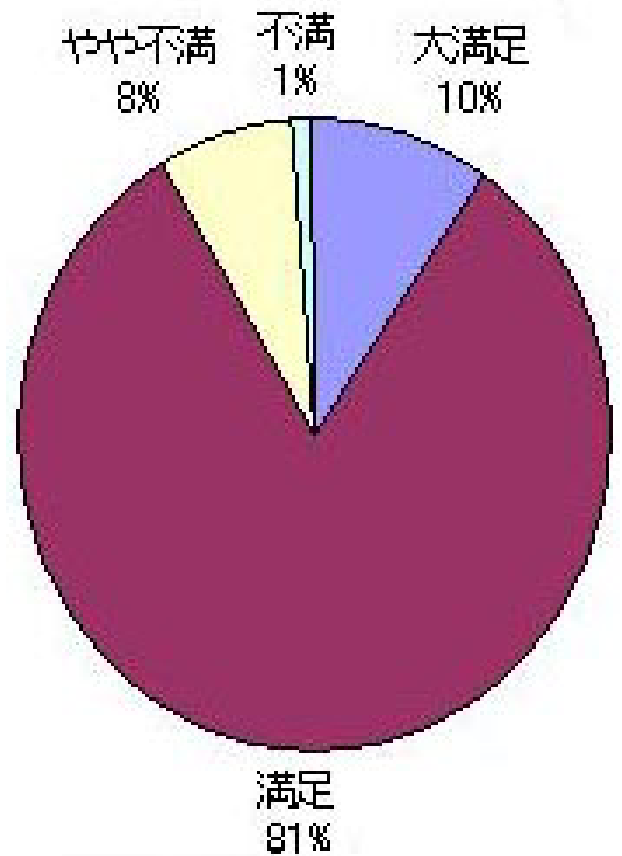


図3 先輩の満足度

それだけでなく，来年度はもう一度先輩と学生の交流のあり方というものを考え，双方のニーズにあわすだけでなく，あるべき姿に双方を引っ張っていくような働きかけがより一層必要となってくるのではないかと思う．もちろん，アンケートで寄せられた改善点やアドバイスを真摯に受け止め，全力で改善し，大胆な変革をも視野に入れ，SMILEの独自性，メッセージをアピールしていきたい．

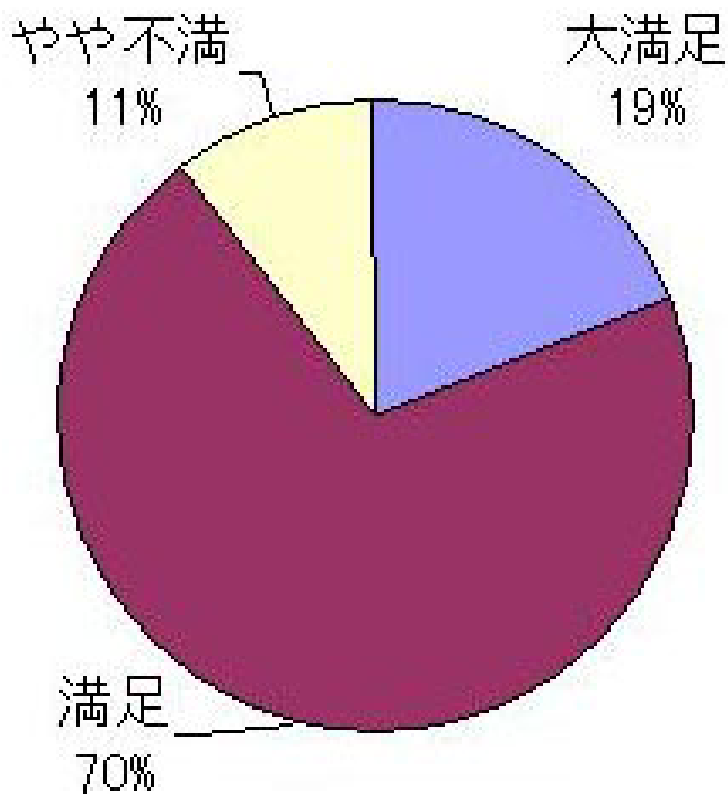


図4 パネルディスカッションへの学生の満足度



【著書紹介】

Working in Japan: An Insider's Guide for Engineers and Scientists ワーキング・イン・ジャパン：科学技術者のためのガイド

本田 博 編著 (ASME) Press (2000)

概要

Foreword はじめに

この10年の間に日本は変わり、外国人の対応に慣れてきたがギャップは依然として存在する。日本は、ポストドクターフェローシップなどで外国人プロフェッショナルを必要としており、そのためのガイドが必要である。また職業のグローバル化に伴い、エンジニアはどこでも働けるよう準備が必要である。

Preface まえがき

日本には、長い歴史に培われた不文律の慣習があり、外国人がこれに適応できれば有意義な生活を送ることができる。本書の内容は以下の通りである。

PART 1 INTRODUCTION 序論

Chapter 1 日本における外国人プロフェッショナルの雇用の現状

職種別外国人雇用の近年の動向と現状、国際化・グローバル化する企業の形態と分類及び企業の外国人雇用の近年の動向と現状、国研・大学における外国人研究者・教授の雇用の動向と現状などについて述べている。

Chapter 2 雇用の将来動向

企業の海外との提携、国研・大学における国際化と外国人研究者・技術者の採用方針などについて述べている。

PART 2 APPLYING FOR A JOB IN JAPAN 日本における求職について

Chapter 3 企業

日本の企業に就職するために海外現地法人の管理者や教授の推薦が有効であることや、業界別、年齢別、役職別給与体系、採用方針、昇進、福利厚生などについて解説している。

Chapter 4 国立研究所

国際共同研究やポストドクター海外研究者を奨励していること、これらへの応募の仕方などについて解説している。

Chapter 5 大学

東京都立科学技術大学教授 福田収一

自分の研究に興味を持ち、支持してくれる教授を探すことが先決である。大学においてもコネが大切であり、いったん就職先を決めると短期間に動かないようにするべきである。

PART 3 FACETS OF JAPANESE SOCIETY 日本の社会の概観

Chapter 6 グローバル及びアジアコミュニティにおける日本社会の概観

現代日本社会の原型は、諸外国の影響を受け徳川時代に形成されたものだが、国際化により特に若い世代は変わってきている。東京は国際化が進み、日本文化は関西や地方の各都市に見られる。また、日本人と中国人、韓国人、台湾人には、比較的特徴がある。日本で成功している外国人は全て日本語に堪能である。

Chapter 7 日本企業の戦後の歴史と概観

故高岩和雄（元千代田化工取締役）

戦後の産業発展史、外国の会社と日本の会社の雇用や仕事の割当の仕方の違いについて述べ、それに適応する方法についても提言している。

Chapter 8 折衝に見られる米国企業と日本企業の比較的特徴

Robert Latorre（ニューオーリンズ大学海洋工学科主任教授）

日本のチームワーク的アプローチと米国の個人的アプローチ、日本の手の内を最初から示さないやり方と米国の直接的なコミュニケーションの仕方、情報収集と意思決定の仕方の違い、目標の立て方の違いなどについて解説している。

Chapter 9 私の見た日本の大学教育

Robert M. Deiters（上智大学教授、元理工学部長、工博）

約40年上智大学で教鞭をとり、研究を行ってきたが、日本の大学の教育は、欧米の大学と異なり日本固有の文化に基づき、クラブ活動、卒研など学生の自主性を重んじたものである。

Chapter 10 日本の大学での英語による講義

Robert Latorre（ニューオーリンズ大学海洋工学科主任教授）

戦後初めて東大工学部で英語による講義を行った体験に基づき、日本と米国の工学教育の違いなどについて述べる。

Chapter 11 家族への配慮

Deborah C. Hann, Stephen A. Hann, P.E.
（メカニカルシミュレーション社社長）

東京都内でコンサルティング会社を営んでいる筆者が、自分達で家を探す場合の苦勞、家賃、交通の便、買い物、物価、住民の対応、文化の違いなどについて述べている。住めば近所の人達とも馴染めるし、東京はキャリアを伸ばすのにも良い。

PART 4 CULTURAL GAPS AND THE LANGUAGE BARRIER 文化のギャップと言葉の壁

Chapter 12 日本での生活に適応するために

Daniel K. Day（デイ翻訳サービス社社長）

住めば都であるが、欧米人が戸惑うであろう経験、ユーモアや直感が日常生活で大切である事、Noと言えない日本人、腹芸、遅い決断、筆者独自の日本語学習法について解説している。

Chapter 13 外人技術系エグゼキュティブが体験したカルチャーギャップ

Raymond C. Vonderau, P. E. (元ベロイト日本支社長)

筆者のオフィスは、日本の大会社の中にあるが、そこで経験した習慣の違い、オフィス環境の違い、マネジメントの違いなどについて述べている。外国人を雇うのであれば、日本企業にもそれなりの努力が必要である。

Chapter 14 一般常識にこだわるな、謙虚になれ、日本語を恐れるな

Craig Van Degrift, Ph. D. (NIST 物理学者、元電総研客員研究員)

日本は均一社会だと言われているが、良く観察すると個性や習慣、独創性などでバラエティに富んでいることが良く分かる。日本語は少しでも使うほうが良いし、謙虚なものの言い方が物事をスムーズに運ぶ。

Chapter 15 カルチャーシミュレーションでカルチャーギャップを埋める

故高岩和雄 (元千代田化工取締役)

文化摩擦、文明と文化の違い、文化に優劣が無いことなどを解説し、パソコンを用いて慣れない日本の文化・習慣に遭遇した場合の対処の仕方について学ぶ方法を紹介している。

PART 5 THE BENEFITS OF PROFESSIONAL SOCIETIES 学協会等公益法人の便益

Chapter 16 アメリカのプロフェッショナル協会・組織の便益とその日本での活動、国際機械学会連合の便益

米国機械学会 (ASME) や米国土木学会などの国際的活動と日本機械学会との比較・連携、国際機械学会連合 (ICOMES) の活動、米国の大学の日本におけるセンターやキャンパス・同窓会の活動とこれらが在日外国人に与える便益などについて述べている。

Chapter 17 その他の国際学協会の便益

日本における英仏独の主な国際組織、アジア諸国と日本との友好協会の活動とその便益について紹介している。

Chapter 18 日本の学協会の便益

各省庁の管轄下にある公益法人、地方自治体の国際交流協会の活動とその便益について紹介している。

Chapter 19 工学技術教育の日米その他における相互認証に向けて :

ABET、JABEE の役割と努力 Winfred M. Phillips, George D. Peterson, Kathryn B. Aberle (ABET 会長、専務理事、準専務理事)

工学技術分野における学術資格・職業資格の標準化・相互認証に向けて行ってきた ABET の活動、日本の学術資格・職業資格が国際的に同等な地位を確保するために設立された日本技術者教育認定機構 (JABEE) の設立趣旨・役割、APEC, WTO などにおける主題に関わる動向について述べている。

PART 6 EMPLOYMENT CASE STUDIES 雇用のケーススタディ

Chapter 20

* 企業 Rockwell- 日立交換プログラム、大阪大学客員教授等を通じての体験
Peter E. D. Morgan, Ph.D. (日立製作所交換研究員・大阪大学客員教授、
Rockwell International Science Center)

日立の超電導研究センターに6ヶ月滞在する前に4回来日する機会があったが、日本語は興味本位にかじった程度であった。日立では研究テーマの設定は迅速で、お互いの意思疎通もうまくいった。日本特有の文化、内外の意識、日本の心など貴重な体験であり、その後阪大、名古屋工業技術研究所にも滞在した。

* 土木技術者の日本の建設業界、製鋼会社での経験

Charles R. Heidengren, P. E. (元ASCE日本支部会長、Schal Associates)

国際化に伴い、日本の建設業界でも外国人技術者の需要が増した。日本の土木技術は優秀であるが、マネジメント関連技術は欠けている面がある。日本の技術者は社内志向であり、学会活動や海外勤務に積極的でないが、将来変わることを期待する。

* ヨーロッパのエンジニアが見た日本の企業

Dimitrios C. Xyloyiannis (サンド薬品技師。1960年代に造船監督を経験)

日本人と仕事をする場合、少なくとも自分と同等以上の知的水準にあると思って仕事をすれば成功確率が高い。トラブル時の責任が日本人に有る事は少なく、肯定的でない文化比較をするのは危険であり、講義をするのも好ましくない。

Chapter 21 国立研究所と民間研究所

Joyce Yamamoto, Ph.D. (モトローラ研究員)

日系女性科学者として出くわした問題、実験にあたって言葉の壁を乗り越えるための筆者の工夫などについて述べている。

Chapter 22 大学序論

日本の大学の大学院化、国際化などの動向について述べている。

日本の大学で終身雇用されるまでのオデッセイ

Giuseppe Pezzotti (京都工芸繊維大助教授、工博)

大阪大学博士課程を修了し、同学、東北大学、豊橋技術科学大学、京都工芸繊維大学での助手生活を経て、外国人として稀な、終身雇用の助教授となるまでの裏話、苦労話が述べられている。

京都大学での観察

Michael W. Barnett, Ph.D. (McMaster 大学助教授、元京都大学講師)

日本の大学は欧米風に見えるが、外見と実質には大きな差がある。教授は絶対的な権力を持ち、研究室という名の家族の長なので、妥当でない要求を教授

にはならない。大学の制度や昇進は融通性に乏しいが、問題は日本的に解決されている。

Chapter 23 会社の設立

Stephen A. Hann, P.E.

有限会社と株式会社の違い、その設立の仕方が述べられている。アメリカでの会社登録は役に立つが、日本の保証会社が必要であり、ビザの問題があるが、だいたいフェアである。

PART 7 CONCLUSIONS 結び

Chapter 24 日本で働いた後のキャリア機会

さまざまなキャリアの外国人の例を挙げ、日本での就職体験はキャリアパスとしても有用であることを述べている。

Chapter 25 結び

求められる資格要件と就職機会、雇用側と雇用される側の興味・利害が一致することの大切さなどが述べられている。

Appendix 1 科学技術者用会社住所電話番号一覧表 国際的に認知され、外国人を雇用しうる企業を収録している。

Appendix 2 科学技術者用国研住所電話番号一覧表 主な国立研究所・機関とその活動概要を収録している。Appendix 3 科学技術者用大学住所電話番号一覧表 大学院を有する主な大学、付属研究所を収録している。

Appendix 4 簡略日本史年表

Appendix 5 日本の休日一覧表

Appendix 6 関東・大阪地域アパート・オフィスレンタル料金一覧表

Appendix 7 日本地図 (JR 路線図付) 他

ASME 日本支部の活動

東京電機大学教授、ASME 日本支部会長 岩本順二郎

1986年に発足し、Sectionとして現在に至るまでの総会、講演会、ニュースレターの発行などの活動について述べている。

(本書に関する問い合わせ先)

〒275-0001 千葉県習志野市東習志野2丁目17番 1-301 本田 博

電話兼ファックス番号：(047)477-0617

e-mail: hiroshi-h@wave.plala.or.jp or Hondah2@asme.org

【支部イベントのお知らせ】

平成 20 年度中部支部総会 & 新人歓迎会・懇親会

日時：平成 20 年 4 月 13 日（日）15:00-18:00（総会）

18:15-20:00（新人歓迎会・懇親会）

場所：株式会社 デンソー Dスクエア 刈谷駅北口から徒歩 3 分

（〒 448 - 0026 愛知県刈谷市中山町 2 丁目 38 番地 電話 0566- 62-0555）

九州支部

<初夏の行事> 霧島温泉とミヤマキリシマ、篤姫・薩摩歴史探訪

1 . 日時：平成 20 年 5 月 31 日(土)～ 6 月 1 日(日) 1 泊 2 日

<懇親会> 5 月 31 日 18 時 00 分～ 20 時 30 分

2 . 場所：霧島国際ホテル〒 899-6603 鹿児島県霧島市牧園町高千穂 3930-12

電話 0995-78-2621

—— 京機短信への寄稿、 宜しくお願い申し上げます ——

【要領】

宛先は京機会の e-mail : jimukyoku@keikikai.jp です。

原稿は、割付を考慮することなく、適当に書いてください。 MSワードで書いて頂いても結構ですし、テキストファイルと図や写真を別のファイルとして送って頂いても結構です。 割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。

宜しくお願い致します。



学生と先輩との交流会

京機学生会執行部 山本康弘

yamamoto.yasuhiro@t03.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

昨年11月10日(土)に今回で5度目となる「学生と先輩との交流会」が開催された。学生約250名、105の企業及び官公庁から先輩約230人のご参加となり、盛況の中交流会を終えることが出来た。運営を担当した京機学生会執行部SMILEのメンバーは、本交流会を成功させるために、試行錯誤しながら企画・準備を進めてきた。とりわけ本年度は、年々リクルート色が強くなってきている傾向からの方向修正を図った。皆様のご理解を得られるか不安な中、準備を進めてきたが、無事会を終えることが出来大変うれしく思っている。

ここで、交流会の開催目的、新しい試みを中心とした企画内容について紹介し、本交流会について振り返りたいと思う。アンケート結果による評価については前掲本文を参照されたい。

1. 「学生と先輩との交流会」の開催目的

本年度は交流会を「学生には広い視野を得ることを含め、今まで持っていた働くイメージとの現実とのギャップを埋めてもらうこと。先輩には、社会において得た実体験をもとに学生と懇談していただき先輩 学生間の親密な交流のきっかけとしてもらうこと」を目的とした。

昨今、若年層の転職の増加が騒がれており、企業と学生とのミスマッチが一つの原因と考えられている。実際未だ社会



に出た経験のない学生は、各々働くことのイメージを持っているが、その現実とのギャップが必ず存在する。そこで交流会を通して、企業で働いている、バックグラウンドの同じような先輩の話から企業や働くことの実際のありようを知ってほしいと考えた。また、私たちが所属する機械系コースでは、毎年多くの学生が機械系の技術者として企業へ就職している。しかし、その中には「機械系に所属しているから、その分野に就職しよう」という漠然とした考えを持つ学生が多いように感じられる。学生に多様な会社に在籍する多様な会員にふれ、社会への視野を広げた上で、技術系へ明確な意思をもって進んでもらいたいという思いからこのような目的を設定した。

2. 「学生と先輩との交流会」における企画、新しい試み

(1) 新しい試み

スケジュールや新企画など4つの面で新しい試みを行った。

より多くの人と長く交流をしてもらいたいという考えから、昨年度よりも一時間以上開始時間を早めた。広報時に午前からの参加を呼びかけ、開始直前に事前説明会を実施するなどを行い、多くの学生に午前から参加いただけた。昨年のような昼過ぎの学生の混雑も見られず、参加者はスムーズに多くのブースを回ることが出来たのではないかと思う。

また、先輩方の出身研究室に、先輩方が事前に交流会に参加されることをお知らせした。学生がより交流会を身近に感じ、又、先輩と先生方の交流の促進を図るため実施した。

さらに学生が先輩方とより積極的に交流できるよう、インフォメーションという形で、SMILEが学生に交流会に関する情報を提供する場を設けた。

また、一教室をサロンとして開放することで、ブースを離れた気軽なやり取りや、学生が長時間交流会に参加するための休憩場所として利用していただけた。

(2) パネルディスカッション

昨年度に引き続き、今年度も複数の企業の方と学生があるテーマに対して議論する「パネルディスカッション」を開催した。企業の方をパネラーとしてあるテーマについて議論していただき、それに学生が適宜質問すると言った形式とした。ブース交流では難



しい，様々な先輩の考えや企業情報等を一度に見聞きし，比較も出来，さらに今まで知らなかった企業の発見も出来る場と位置づけた．今回は，一グループ当たりの企業数を減らし，時間を長くとった．さらに，同業種，異業種，同年代グループとグループ分けを明確にし，より踏み込んだ議論をじっくりと展開出来る様工夫した．

3. 懇親会

交流会とは違ったざっくばらんな雰囲気のある懇親会においても，学生と先輩との活発な雰囲気の中で，親睦を深めてもらいたいと考えた．そこで，SMILE は懇親会への参加を積極的に呼びかけた結果，昨年以上の約 100 名の学生に参加いただけました．さらに懇親会の最初に，先輩に業種ごとのテーブルについていただき，そこに学生も同席するという形をとった．学生同士で固まることなく，世代を超えた交流がなされ，乾杯後も，学生は話したい業種の先輩を見つけやすく，活発な交流が行われた．

最後に，交流会に参加していただいた企業の皆様方，学生の方々，京機会の皆様，そして全面的にサポートいただいた教員各位，本当にありがとうございました．

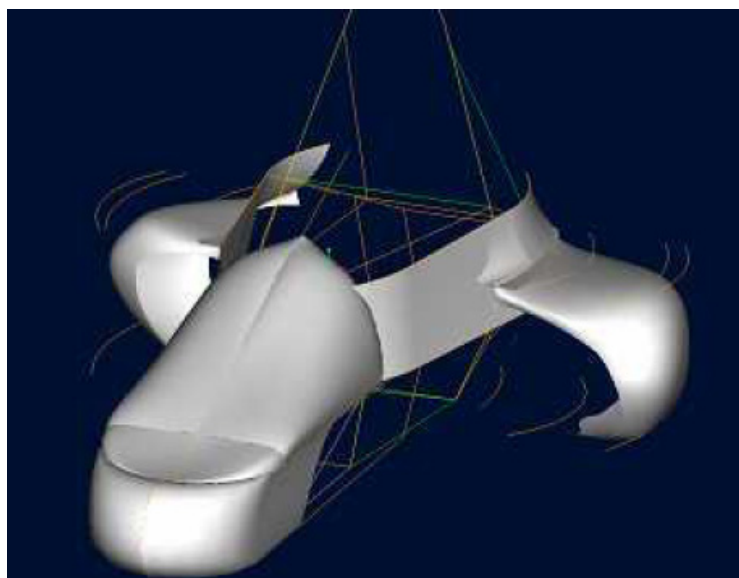
京都大学フォーミュラプロジェクト



京都大学フォーミュラプロジェクト KART
プロジェクトリーダー 鯨岡絵理
E-Mail : BALEINE@514.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

2008年1月期活動報告

京都ではこの1月には幾度か雪が舞い、冬ならではの美しい眺めに、忙しさに疲れた心を癒される事が度々ありました。暦の上では春になりますが、まだまだ冬真っ盛りのこの時期、いかがお過ごしでしょうか。2月7日まではテスト期間ということもあり、大幅な進行はできませんでしたが、材料の発注、また各自時間を見つけての設計の詰め、と製作に向けて地道に歩を進めて参りました。



テスト終了後迅速に製作に取り掛かり、春休みの期間を有効に使うために、納品までに時間のかかる材料、製作初期から必要なジグやフレーム関係の材料等を中心に選定、発注を行いました。具体的には、テストが始まる前の1月中旬までには必要な材料を洗い出し、集計、その後、現在 KART が所有する材料を確認、必要な材料を製作開始に間に合うよう発注致しました。これにより、製作期間を圧迫することの無く、2月からは本格的に製作に入ることができます。5月シェイクダウンを目指し、メンバー一同精力的に取り組んで参ります。